

補論 3. 縄文土器観察の二つの視点 ～使用痕と輪積痕～

①問題の所在

一般に土器を観察する時、縄文土器においてはその施文技法が重点的に観察され、また土師器などにおいてはその調整技法が子細に観察される。言うまでもなく施文、調整は土器を分類する上で根幹となる事項であり、いかなる土器においてもそれらの観察は決しておろそかにされてはならない。またそれらに加えて通常使用痕の観察が行われる。これは当然ながら個々の土器の機能を最も直接的に示す痕跡であり、普通二次的な被熱痕や煤の付着等として残されることが多い。しかし多くの報告書において報文中や観察表等に土器使用痕の観察結果が記載されるにもかかわらず、それが大きく問題にされることはあまりない。中部高地の縄文時代研究において、縄文中期農耕論に関連して藤森栄一らのグループ以降継続的に着目されている程度である。それは遺存度の大きい土器で使用痕が肉眼的に明瞭に観察される例が相対的に少ないこと、また器種分類との対比が困難であることが理由として挙げうるかも知れない。ただ後者については、縄文土器においては器種が比較的未分化で分類が困難であり、従って分類基準が施文に偏ることに少なからず問題があろう。

もうひとつ別の視点として土器の断面観察がある。主として輪積痕が観察されるが、この観察結果が記載されている報告書は少ない。殊に縄文土器の記載においてより少ない。また輪積痕が図示されているものでは、器面に対して直交する接合面、あるいは上端が円い接合面が描かれることが多い。しかし報告者の観察ではそのような接合面を持った輪積痕は稀であり、接合面が器面に対して著しく斜交する、内傾接合あるいは外傾接合の例が圧倒的に多い。土器の成形において、接合面での割れを極力防止するためには接合面を大きく取ることが有効で、しかも内湾、外反いずれにしても曲面を形成する際には、粘土紐（帯）を外側か内側かどちらかに付加して捻りあげるのが合理的である。かつて西日本の突帯文土器から遠賀川式土器への転換時、内傾接合と外傾接合の交替が注目された。家根祥多によるこの研究については、100%断言できないとする意見もあるが、朝鮮無文土器との対比においてきわめて興味深い成果を得ている。このように重要な問題を提起する可能性を孕んだ輪積痕の観察がこれまでとかく軽視されてきたのは残念と言う他はあるまい。

以上2点掲げた土器観察の視点について、本書で特に詳細なデータを提供できるわけではないが、縄文時代研究の上で重要な問題を提起すると思われる観察結果2項を改めて提示して、使用痕及び輪積痕観察について注意を喚起したい。

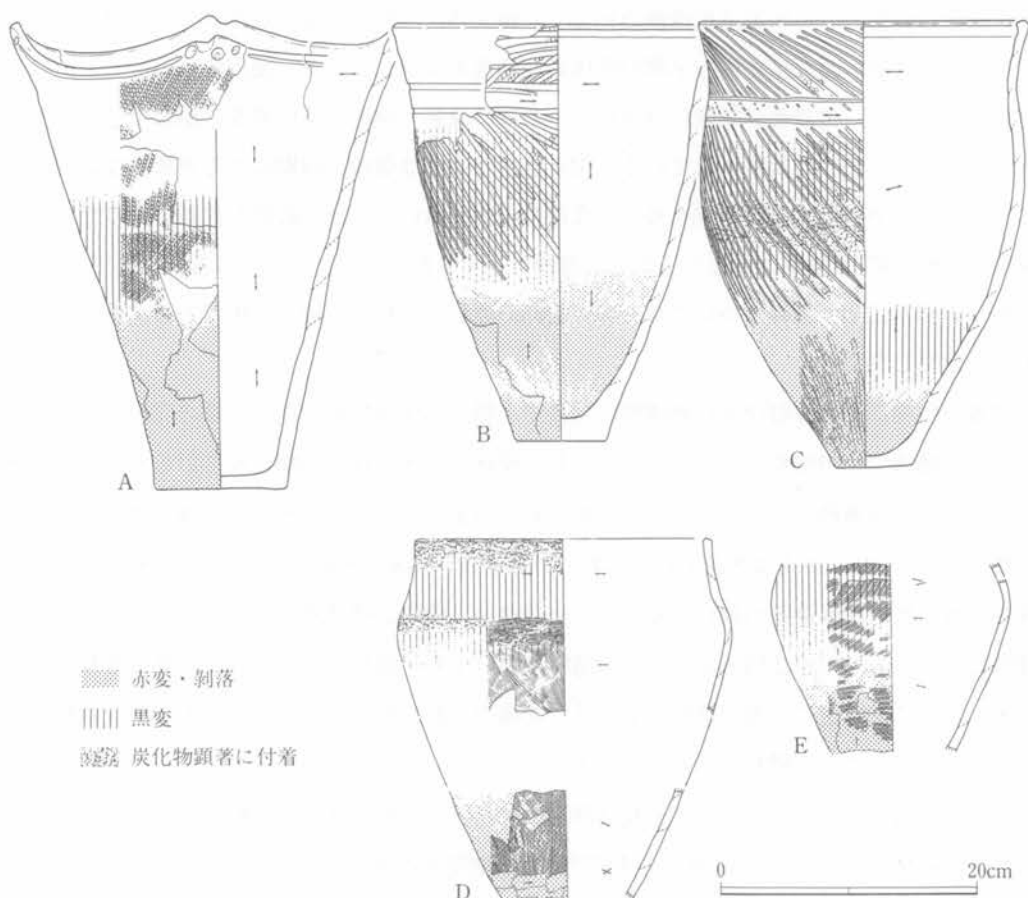
②土器使用痕の観察

土器の使用痕のまとまった観察結果を提示した例として、青沼博之及び宮城孝之の報文があ

る。青沼は長野県原村居沢尾根遺跡の報告で、縄文時代中期井戸尻Ⅲ式期から曾利Ⅱ式期までを主体とする完形及び準完形の土器83個体の使用痕を图示している。使用痕は内面においては炭化物（オコゲ）付着及び黒変、外面においては口縁部～胴部の煤付着及び胴部下位～底部の著しい熱変が一般的に観察されている。图示された中では個体、時期による差異はないと言ってよいが、やや特徴的な使用痕を残す有孔罎付土器を除いて他は一般的な深鉢ばかりで、また使用痕（煮沸痕）が観察されない土器との器種としての差の有無については言及されていない。しかし曾利Ⅰ式期の浅鉢については一部に底部の著しい損耗が一種の使用痕として報告されており、注目してよい。

宮城は印旛郡酒々井町伊篠白幡遺跡の報告で、縄文時代後期堀之内Ⅰ式期の完形及び準完形の土器32個体の使用痕を图示している。殆どが深鉢で、他に鉢と分類されているものが3個体ある。居沢尾根遺跡のような内面の炭化物付着は顕著ではないが、それと同様の痕跡（炭化物付着の残留）として黒変は普遍的に見られ、外面下位の熱変（赤変）、その上位の黒変（煤吸着）等の状況は居沢尾根遺跡の場合と変わることはない。伊篠白幡遺跡では炭化物の付着は外面口縁部に見られるものが2個体ある。この遺跡においても「器種」と使用痕の関係は言及されないが、このことは逆に土器の機能の上では、文様や器形の多少の差はあっても明快な器種分化が指摘できないことを窺わせるものと言えようか。

当内黒田遺跡群から出土した完形及び準完形の土器で明瞭な使用痕が観察されるものを例示したのが第168図である。Aは堀之内Ⅰ式土器で、池花南遺跡から出土したものである。外面の底部から1/3までが赤変し胴部中位が黒変しており、強い火熱を受けたものであることは疑いないが、内面には顕著な使用痕は残されていない。Bは池花遺跡出土の加曾利B式土器で、外面の使用痕はAと全く同様である。また内面には底部から胴部下位に器面剝落等被熱の痕跡が観察される。Cは池花南遺跡出土の加曾利B式土器で、前2個体よりもさらに顕著な使用痕が残されている。外面はA、Bと基本的に変わらないが、胴中位の黒変部分のさらに中央には炭化物が帯状に付着する。これによりかかる二次的な黒変は煮沸時の吸炭によることは明らかである。一方内面は底部に剝落が目立ち、そのやや上位に帯状に黒変した部分がある。これは所謂「オコゲ」の残留と見られる。これら3個体の縄文後期の土器については青沼や宮城が報告した観察結果の多くに合致するものである。Dは池花南遺跡出土の縄文晩期最終末と考えられる土器で、胴部中位が少し欠失する。外面胴部下位は顕著に赤変するが、胴部中位には遺存部分からの推定であるがあまり明らかな使用痕がなく、肩部以上が黒変、特に口縁部と肩部に炭化物の付着が目立っている。Eは池花南遺跡出土の弥生中期前半の土器で、やはり肩部以上に顕著な黒変が認められる。このような在り方は居沢尾根遺跡や伊篠白幡遺跡でも認められるが、内黒田遺跡群では一般に炭化物を付着させた土器は圧倒的に晩期以降に多く、その部位も口縁部と肩部である。僅かな資料からではあるが、使用痕の在り方が後期と晩期では異なっていると



第168図 土器の使用痕 (1/6)

すれば、土器の使用に変化が現れたことになるが、他遺跡ではどうであろうか。この問題の検討にはより広範囲に資料を集成しなければなるまい。しかしここではこれ以上は触れず、別に池花南遺跡の縄文時代晩期の土器から観察された興味深い事実を指摘しておきたい。

③池花南遺跡出土千網式土器の使用痕

池花南遺跡から出土した千網式土器は量的なまとまりを見せ、多様な器種を含んでいたが、それらの中で煮沸痕と思われる使用痕（炭化物付着等、曖昧な黒変は除く）を残した土器は9個体ある。列挙すれば第100図36、38、第101図61、63（これは底部だけの個体で強い赤変及び剥落）、第102図64～67、68～69、第103図70～71、72～73、第104図74である。それらの特徴としては羽状文を持つ甕、鉢、撚糸文施文の甕ということになる。他の土器との対比で見れば、浅鉢、壺には煮沸痕が見られず、また有文の甕、鉢では羽状文を施すものだけに煮沸痕が観察され（3個体中2個体）、平行沈線や工字文を施す甕には顕著な使用痕が認められない。一般に

複合口縁（折返口縁）を持つ撚糸文施文の「粗製土器」では、小片は別として器形が判別できる個体で見る限り、甕に顕著な煮沸痕が認められ、深鉢、鉢では74にしか煮沸痕が残されていない。ここで見る使用痕（煮沸痕）は63を除いていずれも外面口縁部から肩部そして胴部に炭化物が付着し、また底部まで遺存する72～73では内面胴部下位に黒変及び炭化物の付着と底部外面の熱変が、38でも胴部下位の破片と思われるものの内面に黒変及び炭化物の付着が観察された。これらは皆共通して「オコゲ」、「吹きこぼれ」、煤吸着が残存したものと考えることができる。

以上の事実から考慮しなければならないことの第一は器種の呼称である。特に撚糸文施文の土器群については器形によって明確な使い分けが行われていたと推定される。鉢、深鉢のうち74に煮沸痕が観察されたが、これは75～81に示した煮沸痕を残さない深鉢、鉢とは器形及び口端に刻目を施す点で異なっており、製作時にも一線が画されていたよう。もはやこれら本来目的とする機能が異なる土器群を「粗製土器」などという安直な呼称で一括できないことは明白である。撚糸文施文の甕は、機能としてはより装飾性の高い羽状文施文の甕、鉢と共通性を持つことになる。第二に考慮する必要があるのは、縄文時代晩期にはそれ以前の長い時代よりもかなり器種分化が進んだ可能性があることである。この器種分化は特定の器形、特定の施文に対して特定の機能が与えられるということであり、文様の多様性等とは直接的に対応はしないであろう。しかしこれらを実証するにはやはり池花南遺跡単独の資料ではあまりにも不十分で、今後器種分類に際して使用痕観察と連繫した視座が必要であるとともに、時期毎、地域毎の比較検討がなされねばならない。

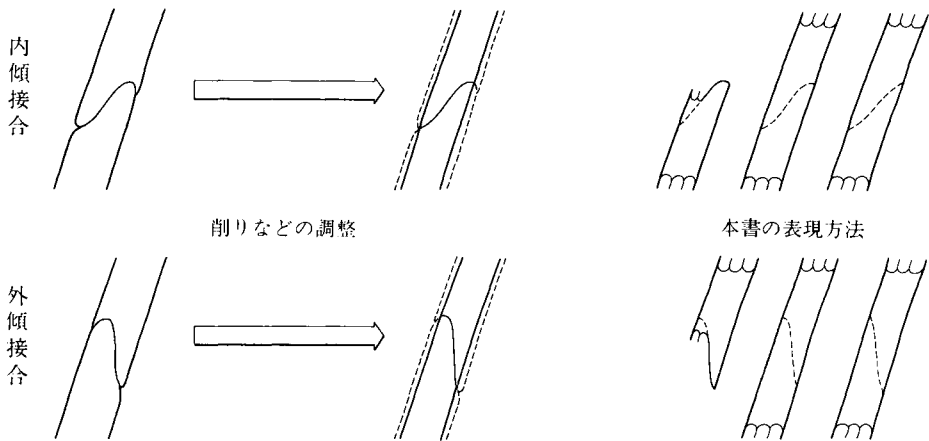
④輪積痕の観察

内黒田遺跡群で出土した縄文土器、弥生土器については、それらの大半において断面に輪積痕が観察された。すべての土器で粘土紐（帯）接合痕が明瞭なのではないが、胎土中の砂粒等の流れる方向によって内傾接合か外傾接合かを見、器面の微妙な形状によって接合部位が判断されるものもある。勿論粘土紐の幅をいずれの土器においても決定するのは不可能であるが、しかし少なくとも内傾接合であるか外傾接合であるかの判断は難しくはない。

このようにして輪積痕を観察すると、時期によって内傾接合と外傾接合の頻度が異なることが解る。ここで内黒田遺跡群で出土した土器のうち、ある程度その傾向が判別できる時期の土器における内傾接合と外傾接合の比を列挙してみたい。ここで示す個体数は内傾か外傾かを明確に判別できないものは除いてあり、個体内で部分的に逆転する場合は主として用いられる接合方法に従う。また明記しない限り池花、池花南、大割各遺跡の資料を合計してある。

縄文前期後葉（浮島・興津期） 内傾8個体：外傾39個体

前期後葉は外傾接合が多い。殊に興津期に比定される池花遺跡A～C地点出土土器で見ると



第169図 土器の輪積痕模式図

さらにその比率は高い。ただし器形、施文による差は認められない。

加曽利E期 内傾6個体：外傾9個体

資料数は少ないが、やはり外傾接合が優勢であると言える。報告者が実見した他遺跡の加曽利E式土器についても外傾接合が多かった。例えば隣接する物井地区御山遺跡の阿玉台～加曽利E期の土器は、判別可能なものはすべて外傾接合であった。

称名寺期（大割遺跡集中地点） 内傾13個体：外傾2個体

逆転する。集中地点以外の土器では遺存度が悪いものが多く明確でないものもあるが、内傾接合が優勢な状況は大割遺跡集中地点以外の土器を加えても揺るがない。

加曽利B期 内傾147個体：外傾0（1？）個体

100%内傾接合と言ってよい。ただ個体によって肩部の一部に外傾接合が用いられることがあるが、それらにしても全体で見れば内傾接合によって作られている。

曾谷～安行1期 内傾45個体：外傾0（1？）個体

加曽利B期と同様。池花遺跡出土の安行3a式土器でも内傾接合4個体に対し外傾接合は皆無であった。

晩期後葉以降についても基本的に内傾接合で作られている。ただ加曽利B期などで肩部の傾斜変換点のみ外傾接合が用いられていたものが、肩部以上全体が外傾接合で作られる傾向が認められる。

早期については資料の絶対数が少なく傾向を読み取ることはできないが、全体として縄文前期、中期には外傾接合が優勢で、後期以降内傾接合が圧倒的に優勢になる。これには器形自体の影響があると思われるが、外傾接合と内傾接合の転換点が称名寺期にあることは確実であろう。既述したことであるが、大割遺跡称名寺期集中地点出土土器のうち、外傾接合を用いる土

器が2個体あり、本書の分類ではc ii類としたものである。c ii類は加曾利E式土器からの系譜を最も直接的に体现する土器であり、それらが外傾接合を用いているのはきわめて象徴的な現象と言わなければならない。当遺跡群においては加曾利EIV式土器は出土しておらず、果たしてその段階に外傾接合が主体的であったかは他遺跡の例に拠らざるを得ないが、残念ながら外傾か内傾かの輪積痕が示されている例は殆どない。ただ経験的に報告者の観察で外傾が多いと言えるのみである。また称名寺式土器に優勢となる内傾接合は新来の要素と予想しているが、中部以西の中津式土器やその前後の土器群についても輪積痕の観察が行われている例が殆どなく現在のところ対比は不可能である。しかしこれはその結果如何によっては重大な問題を提起する可能性があり、今後充分に検討される必要がある。

⑤まとめにかえて

以上述べた土器観察の二つの視点は、これまで観察されていても一部でしか問題にされていなかったり、またはあまり観察されていなかった事項である。したがってここで内黒田遺跡群出土土器の観察結果を提示したとて、他遺跡の資料との対比ができず、詳しく論を展開することができない。しかし土器の使用痕観察からは器種の機能、器種構成の変化が、輪積痕観察からは土器製作の系譜（したがって人的な動きまで）が追える可能性がある。ここでそれらに対する注意を喚起することでまとめとしたい。

註1 武藤雄六「生活用具としての土器」藤森栄一編『井戸尻』中央公論美術出版 1965

武藤雄六・小林公明・他『曾利』富士見町教育委員会 1978

2 家根祥多「縄文土器から弥生土器へ」『縄文から弥生へ』帝塚山考古学研究所 1984

3 青沼博之編『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－原村その4－昭和51・52年度』長野県教育委員会 1981

4 宮城孝之・他『酒々井町伊篠白幡遺跡』千葉県文化財センター 1986